

特集

2015年

# 薩摩藩英国留学生派遣から 150周年を迎えて

今夏、現代版 薩摩スチューデントを派遣！



(後列左から) 高見弥一(たかみ やいち)、村橋久成(むらはし ひさなり)、  
東郷愛之進(とうごう あいのしん)、名越時成(なごや としなり)  
(前列左から) 畠山義成(はたけやま よしなり)、森有礼(もり ありのり)、  
松村淳蔵(まつむら じゅんぞう)、中村博愛(なかむら はくあい)



(後列左から) 朝倉盛明(あさくら もりあき)、町田申四郎(まちだ しんしろう)、  
鮫島尚信(さめしま なおのぶ)、寺島宗則(てらしま むねのり)、吉田清成(よしだ きよなり)  
(前列左から) 町田清蔵(まちだ せいぞう)、町田久成(まちだ ひさなり)、長澤鼎(ながさわ かなえ)



ロンドン到着後の  
薩摩藩英国留学生  
(1865年8月撮影)  
鹿児島県立図書館所蔵

## 「薩摩藩英国留学生」

1865年春、薩摩藩の19人の若者が鎖国を破り、英国へ旅立ちました。彼らは、西洋のカルチャーショックを受けながら必死に学び、帰国後は近代日本の国づくりに大きく貢献しました。その渡航から150年。今夏、「薩摩スチューデント派遣事業実行委員会」県、鹿児島市、阿久根市、いちき串木野市および伊佐市などで構成)は、19人の若者を英国に派遣。一方、英国でも薩摩藩英国留学生や鹿児島を紹介するさまざまなイベントが開催されました。

そこで、激動の明治維新を駆け抜けた薩摩藩英国留学生について改めて振り返り、150年を経て語り継がれる彼らの功績や志について紹介します。

文中はすべて新暦を使用しています。



島津斉彬 (尚古集成館所蔵)

### 留学生派遣に向けて

19世紀、産業革命を遂げた西洋列強の艦船が、琉球を中心に日本近海に接近します。薩摩藩は琉球を支配していたため、いち早く外圧の危機にさらされました。それに対抗するため、藩主島津斉彬は、藩独自で富国強兵・殖産興業政策をとります。集成館事業を中心とする産業の近代化は、西洋列強に負けない国づくりを目指したものでした。斉彬は、若者たちを西洋に留学させる計画を持っていましたが、藩主就任わずか7年で急死し、計画は中止されました。

留学生派遣が再び現実味を帯びるのは、文久2(1862)年の生麦事件をきっかけに、翌文久3年に起きた薩英戦争でした。薩摩藩は英国の技術力や軍事力を目の当たりにし、戦後急速に英国に接近していきます。

鹿児島城下に英語や海軍技術を教える洋学校「開成所」が設置され、その生徒を中心に選抜されたのが薩摩藩英国留学生です。



薩英戦争絵巻 (尚古集成館所蔵)

### 留学生、西へ

当時、鎖国下で海外渡航は厳禁だったため、留学生一行は人目につきにくい串木野郷羽島浦から、甌島へ出張という名目で、全員変名で出航することになりました。

羽島で待機すること2か月、長崎の貿易商グラバーの船が迎えに来て、いよいよ出航。香港では街のガス灯に驚き、シンガポールの港では、別れのキスをする夫婦を見て衝撃を受けます。インドのボンベイではビルや街並みに圧倒され、エジプトでは初めて蒸気機関車に乗りました。

2か月余りの航海を経てロンドンに到着した彼らは、大学入学に向けて英語を猛勉強。鉄工所の見学や記念撮影にも出かけました。前ページの写真は、この時撮影したものです。

### 英国で学んだもの

留学生たちが入学したUCL(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)は、人種や宗教にこだわらず広く門戸を開いていました。ウィリアムソン教授が身元引受人となり、彼らは必死に勉強に励みました。

薩摩藩英国留学生は、団長の新納久脩、外交使節の寺島宗則、経済使節の五代友厚、通訳の堀孝之、そして町田久成率いる留学生14人を加えて、総勢19人。寺島はイギリス外務次官と面会し、対日政策を有利にする交渉を行い、新納、五代、堀は、武器や軍艦、紡績機械の購入や技師の派遣の契約など精力的に活動しました。ちなみに、日本最初の洋式紡績所である鹿児島紡績所にすえられたのはこの紡績機械で、その指導を行う技師の住宅が、鹿児島市磯の異人館です。

帰国後の活躍を見ると、寺島や鮫島尚信、吉田清成のように外交で活躍した人、五代をはじめサッポロビールの村橋久成やカリフォルニアのワイン王の長沢鼎のように産業で活躍した人、森有礼をはじめ東京大学の前身の開成学校校長の島山義成や東京国立博物館を創設した町田のように教育・文化で活躍した人などがいます。このようにさまざまな分野で、明治日本の国づくりに大きく貢献しました。

## 英国留学生派遣と集成館事業の意義

鹿児島県知事公室政策調整課 専門員 吉満 庄司



【プロフィール】  
1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学大学院修了。  
県立高等学校教諭、県歴史資料センター黎明館学芸専門員、県総合教育センター研究主事を経て、昨年度から県の明治維新150周年記念事業を担当。専門は幕末維新史。

英国留学生たちの日記を読むと、出航にあたっては、まるで戦場に向かう心境だったことが分かります。彼らが、まさに命懸けで学んだ知識や技術は、明治日本の礎となりました。一行がロンドンに到着して一週間後、3人の長州藩士の訪問を受けました。話をしているうちに、藩という枠を超えて、日本の将来を共に考える同志となっていくきます。薩長同盟は慶応2年1月に成立しますが、その前にすでに両藩の留学生たちは固く結ばれていたのです。

本年7月、「明治日本の産業革命遺産」が、世界文化遺産に登録されました。集成館事業も留学生派遣も、藩独自でも近代化を図るため、莫大な経費と労力を投じた一大プロジェクトでした。

明治維新は薩長を中心とする官軍が幕府を倒したというイメージがありますが、それは一つの場面に過ぎません。西洋列強に対抗するための国家建設、その裏付けとなる近代化の大きな動きと捉えなくてはなりません。

藩独自でいち早く取り組んだ薩長両藩は、当然その中で重要な役割を果たしていきます。

西洋文明に全身で浸りながらも、愛国心を持ち続けた留学生たちは、やがてそれぞれの道を歩みます。出会い・友情・別れを経験し、使命感に燃えた彼らの人生の輝きは、150年経った今も、色あせることなく語り継がれています。ここでは留学生の中から、対照的な人生を歩んだ2人にスポットを当ててご紹介します。



鹿児島県歴史資料センター  
黎明館所蔵

## ～日本経済の立役者となった実業家～

五代 友厚 Tomoatsu Godai (1835～85年)

鹿児島城下・城ヶ谷（現在の鹿児島市長田町）で誕生。13歳のとき、父が藩主 島津斉彬から世界地図を預かると、2枚複写して1枚を斉彬に献上し、もう1枚は自室の壁に張って、世界に心を躍らせた少年だったといえます。

21歳で長崎の海軍伝習所に留学し、勝海舟や、のちに留学生を支援する英国商人トーマス・グラバーと交流。

英国への航海中、小便器を洗面器と思い込み、その水で顔を洗ってしまったとか。この話は尾ひれがついて「小便器にて口を漱いだ」と言われたなど、面白いエピソードも残っています。

英国では、経済使節として紡績機械や武器・軍艦の買付けをはじめ、貿易会社（ベルギー商社）の設立などに奔走しました。

明治維新後は、大阪を拠点に紡績、鉱山、鉄道など数々の事業を興し、衰退していた大阪の経済を立て直します。大阪証券取引所を設立し、大阪商法会議所の初代会頭となりました。

近代日本のビジョンを見据え、偉業を成し遂げながらも、50歳の若さで逝去。

彼の卓越した行動力と潔い生き方は、多くの歴史上の人物に影響を及ぼしました。



五代友厚の銅像  
（鹿児島市泉町）

## ～ワイン王となったラスト・サムライ～

長澤 鼎 Kanae Nagasawa (1852～1943年)

英国へ渡航時13歳と最年少だった彼は、乗船する直前、誰よりも早く髷まげを切り、母に送るため使者に渡しました。幼少ながらも、武士としての覚悟の表れだったのでしょうか。

年少の為、一人だけスコットランド・アバディーンアバディーンの中学に入学。ラテン語・英語・地理で優秀な成績を修め、現地新聞に名が掲載されるほどでした。

宗教家トーマス・ハリスに伴い、米国に永住し、カリフォルニアでぶどう園の経営とワイン製造に尽力。弛まぬ努力で一大産業を築き、「ワイン王」「カリフォルニアの奇跡」と称えられました。

留学生が次々と帰国するなか、ただ一人アメリカに残り、生涯で日本に帰ったのは3度だけでしたが、彼の胸中には常に祖国がありました。生涯独身を貫き、長澤の甥や姪の談話によると、武士だった過去は決して語らなかつたそう。しかし部屋にはいつも木刀があり、時折素振りの音が聞こえたといえます。1934年（昭和9年）満82歳で生涯を閉じました。

まっすぐに自分の信じた道を開拓し、激動の時代を駆け抜けたラストサムライ。

日米両国の架け橋にと、彼を支え続けたものは、武士としての誇りだったのかもしれませんが。



トーマス・ハリスと長澤鼎  
（写真2点：鹿児島国際大学所蔵）

参考文献：犬塚 孝明『薩摩藩英国留学生』、門田 明『若き薩摩の群像 サツマスチューデントの生涯』  
取材協力：薩摩藩英国留学生記念館

いちき串木野市羽島には、薩摩藩英国留学生が  
分かりやすく学べる記念館があります。  
150年前、この地から旅立ったことに思いを馳せ  
ながら、心地よい潮風を感じてみませんか。

## 薩摩藩英国留学生記念館

2014年夏、いちき串木野市羽島にオープン。薩摩藩英国留学生の一行が英国に向けて旅立った、記念の場所に建てられました。

貴重な展示資料をもとに、留学生たちの壮大な旅と活躍の物語が広がっています。

留学生が旅立ちの前、「お世話になりました。必ず戻ってくるので、元気にしてください」と滞在先(羽島)に残した形見の袴かみしもなどは、必見!

併設されたカフェレストラン「クィーンズカフェ」では、英国式アフタヌーンティーや羽島牛を使ったカレーなども楽しめます。



船をイメージした赤レンガ造り。景色が最高!



旅立ちの前に残した袴(薩摩藩英国留学生記念館所蔵)



### DATA

開館時間／展示観覧10:00~17:00

カフェ・ライブラリー等 \*季節による

休館日／火曜日(火曜日が祝日の場合は翌日)

12月29~12月31日

観覧料／大人(高校生以上) 300円

小人(小学生・中学生) 200円

※団体割引(20名以上)、障がい者手帳を保有するお客様は一律50円引き

アクセス／九州新幹線 川内駅から車で約40分

鹿児島本線 串木野駅から車で約20分

鹿児島県いちき串木野市羽島4930番地

TEL.0996-35-1865

詳しくは、同館ホームページをご覧ください。

薩摩藩英国留学生記念館

検索



## 羽島史跡顕彰会

羽島に縁のある偉人や史跡を偲び、後世に伝えようと、昭和63年に発足し、現在では50人近くの会員がいます。

薩摩藩英国留学生を後世に語り継ごうと、平成元年から毎年4月「黎明祭」を開催し、現在まで四半世紀以上も続いています。これだけ長く続いたのは、地域や学校を挙げて、青少年の育成もテーマに取り組んできたからです。

黎明祭では、地元の小・中学生が留学生に扮してスピーチをし、漁船に乗って旅立つシーンを再現。最近では、鹿児島市内のホテルのイベントにも呼ばれ、出演をしています。

11月7日・8日は、「国民文化祭・かごしま2015」で、「薩摩藩英国留学生フェスティバル」がいちき串木野市で開催されます。

歴史を学びに、ぜひお越しください。



羽島史跡顕彰会 会長の川口勝則さん



写真提供: いちき串木野市



# 現代版薩摩スチューデントを派遣！

「薩摩スチューデント派遣事業実行委員会（県、鹿児島市、阿久根市、いちき串木野市および伊佐市などで構成）」では、当時の留学生一行とほぼ同じ年齢層の青少年を英国に派遣しました。

当時の足跡をたどりながら、現地で交流を行い、鹿児島と英国との交流を促進しようと実施されたものです。今夏、中学生～社会人19人の青少年が元気いっぱい出発した模様をお知らせします。

★★★★★

## 羽島の地で 出発式



県内より選出された青少年19人は、いちき串木野市羽島で出発式を行いました。団員を代表して藤崎麗美さん（羽島中3年）が「当時の留学生がどのように苦労したのか学び、帰国後は多くの人々に留学生たちのことを伝えたい」と抱負を述べました。

一行は、留学生が学んだUCL（ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン）での交流プログラムや、英国在住の鹿児島ゆかりの方々との交流会、ホームステイに参加し、留学生ゆかりの地などを訪ねました。

【派遣期間】 平成27年7月19日（日）～29日（水） 11日間（うち英国滞在は9泊）  
 【プログラム内容】 UCL訪問、鹿児島ゆかりの方々との交流会、留学生足跡訪問、現地の人々と交流・ホームステイ、アバディーン市内視察など

★★★★★

## 英国滞在記

在英国日本国大使館を表敬訪問。日英関係などについての説明を聞き、団員からは、「外交官はどのようにしたらなれますか？」などの質問がありました。

続いて、大英博物館を見学。薩摩藩英国留学生渡英150周年のイベントなどを企画支援している「薩摩150」の代表で、同館の学芸員であるトーマス・いづみさん（鹿児島県出身）の案内で、町田久成（東京国立博物館初代館長）に関する展示などを見学しました。



町田久成に関する展示を見て感動！



英国人とチームを組みクイズ大会に挑戦



鹿児島ゆかりの方々との交流会



当時の学籍簿で留学生の名前を発見！

# 2015年夏

## 交流会の様子



アバディーン市長を表敬訪問。  
市長から団員一人ひとりにマフラーがプレゼントされるなど、  
大歓迎を受けました。

UCLでは、日本全国から参加した高校生や英国人高校生を含めた約80人がグループごとに、文化の違いや地球規模の問題について、英語でディスカッション。  
UCL主催の記念レセプションでは、学長や在英日本国特命全権公使らが出席し、学長から、「今回の薩摩ナインティーンの訪問を歓迎します」と挨拶がありました。  
団員を代表して、小牟田一翔さん（川内高2年）が、「薩摩藩英国留学生のようになるよう、これからも頑張りたい」と抱負を述べました。  
懇親会では、当時の留学生を支援したウィリアムソン教授の子孫や、元副学長とも交流を深めました。

アバディーン市長主催のレセプションでは、おはら節の披露や、書道の実演が大好評！  
スコットランド民謡である「蛍の光」を合唱して、盛り上がりました。  
終了後はそれぞれのホストファミリーの家で、英国の生活文化を体験しました。



歓迎レセプションでUCL学長に御礼

世界を肌で感じた団員らは、帰国して英語の勉強に一層励んだり、外国人をホームステイで受け入れたり、国際交流への関心が深まったようです。  
今後、OB会の結成などが予定されています。  
県では鹿児島島の未来を担うグローバル人材の育成を図り、青少年の国際交流を今後も促進していきます。



長澤が通った中学校校舎がある  
アバディーン大学植物園

長澤県が通った中学校校舎が残る、アバディーン大学植物園や、トーマス・グラバーの展示などがある海洋博物館を訪問。  
自治体国際化協会ロンドン事務所では、英国についての知識を深め、全11日間の行程を終えて帰国しました。  
知事表敬訪問、帰国報告会では、団員らが、英国での体験を生き生きと語っていました。

## 団員レポート



知事表敬訪問で発表する  
島中 紗希さん  
(鹿児島実業高2年)

奄美市立名瀬中学校2年

もり ゆうり  
森 悠里さん



英語のディスカッションでは、前半は自分から意見を述べる事ができませんでした。後半は先生方からアドバイスを受けて、「日本の給食」について発表しました。UCLの学生が興味を持ってくれ、達成感と共に、嬉しくて涙がこぼれそうでした。  
これからどのように人生を進んでいくか、何を目標にするかについて答えが見つかり、自分の夢に向かって大きく前進できたと思います。

鹿児島国際大学4年

ほんだ ゆうさく  
本田 優作さん



現地の高校生は日本で見たことがないくらい積極的で、活発に意見交換し、そのスピードについていけません。消えかけていた英語の向上心に、再び火をつける、非常に刺激的な経験となりました。  
今後は、研修の成果をできるだけ多くの人に伝えることで還元し、「英国に行ってみよう」「活躍したい」と思う人が増えるよう努めていきたいです。

問い合わせ先 県庁国際交流課 ☎099(286)2303